

岩手県金ヶ崎町(城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区)より輩出せる明治女医2名

福嶋 正和

千葉市桜木園

受付：平成21年12月11日／受理：平成22年4月15日

要旨：岩手県金ヶ崎町には城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区という武家屋敷群があり、明治末期に同地区より明治女医2名が輩出している。相沢ミサホは明治18年に牧師の家庭で出生し、同志社女学校を経てフィラデルフィア女医大に留学、明治43年に帰国、医師登録された。曽根牧師と結婚し、日赤福岡支部診療所で訪問診療等に専心従事した。志賀ミエは明治13年に貧乏士族の家庭で出生、東京の医学校で苦学を重ね、医術開業試験に3回失敗するも明治44年に合格し医師登録された。大正元年に見ず知らずの宇都宮で内科・小児科医院を開業し、深夜の往診も厭わず患者の信頼を得て的確な診断が評判となり門前市をなした。

二人は家庭環境の違いや年齢差等により特に交流や接点がなかった。しかし、二人は教育熱心な父親に養育され、努力を重ねて明治女医として成長していった。明治時代には女性の社会的地位は低く、女性の義務教育就学率も低く、女子医学校の不整備などのマイナス要因があったにも拘わらず、相沢ミサホはキリスト教の影響により、志賀ミエは家族の暖かい支援と武士道精神によって医道を突き進んでいった。

キーワード：金ヶ崎町、相沢ミサホ、志賀ミエ、キリスト教、武士道精神

I はじめに

三崎裕子「明治女医の基礎資料」によれば、明治時代に医師登録された女医(以下、明治女医と略す)の総数は239名を数えている¹⁾。著者は以前、文化座公演「ほにほに、おなご医者」の舞台を鑑賞し、その主人公「志賀ミエ」が実在の明治女医であり、同女医の出身地が岩手県胆沢郡金ヶ崎町であることを知った。同女医の生涯については直系の孫志賀かう子の著書に詳しい²⁾。同町の一角に国から指定された城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区があり³⁾、そこで同女医が学童期まで生育した。著者が同女医について調査している内に胆江日々新聞の記事でそこからもう一人の明治女医「相沢ミサホ」が輩出されたことを知った⁴⁾。しかも同女医は米国に留学したとのことで同女医の生涯に興味を持った。明治女医239

名のうち2名がほぼ同時代(医師登録が明治末期)に狭い同保存地区から輩出したことは何らかの背景があったのではないかとみて調査・考察したので報告したい。

II 金ヶ崎町の歴史と現状、とくに城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区について

岩手県胆沢郡金ヶ崎町は岩手県の南西部に位置し、北は北上市、南は水沢、江刺等の合併した奥州市や一関市に囲まれた人口1万6千余りの町である。

1) 歴史的概要

同町は江刺とともに仙台伊達藩62万石の最北端に位置し、南部藩領と対峙する重要な軍事的拠点であった。従って、伊達政宗は金ヶ崎を要崖地

として家老大町定頼に託し、明治維新まで大町氏が9代に亘って統治した⁵⁾。明治維新の戊辰の役では、薩長連合軍に他の奥州諸藩と共に対抗したため、伊達藩は領地を没収され、62万石から28万石に減封された。大町家9代目殖頼の館は即時破壊となり、家臣達は「凡輩の臣、婦農勝手たるべし」と捨て置かれた⁶⁾。家臣達は養蚕業、農業、商業等に従事したが、「武士に商法」の譬えの通りやることなすこと中途半端となり、極貧を余儀なくされた。更に自然災害、凶作にたびたび見舞われ、被害は大きく悪疫流行もあり極貧に輪を掛けたという⁷⁾。

この地域は明治4(1871)年の廃藩置県により、一関県と呼称されたが、さらに水沢県、磐井県と目まぐるしく改称され、この地域が現在の岩手県に編入されたのは明治9(1876)年である。明治23(1890)年には東北本線が貫通し明治30(1897)年には金ヶ崎駅が開業し同町の発展の礎が築かれ

た⁸⁾。同町は従来、農業、酪農業を基盤産業としてきたが、昭和40年代に同町の一部は金ヶ崎工業団地として開発造成され、昭和50年代から各種企業が操業開始し発展の途上にある⁹⁾。

現在、同町は国際交流に力点を置き、中国吉林省長春市、米国マサチューセッツ州アマースト町、ドイツ・チューリンゲン州ライネフェルデ市と姉妹都市の契約を結び、人的交流を推進している⁹⁾。特に、アマースト町は札幌農学校のW・クラーク博士の出身地であり、新島襄、内村鑑三らが学んだアマースト大学があり、キリスト教的文化の漂う町である。

2) 城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区(以下、同保存地区と略す)

金ヶ崎町の東端に、大町氏の金ヶ崎館を中心に家臣達が住み着いた武家屋敷群がほぼ江戸風情を残して存在している。この地域は平成13(2001)

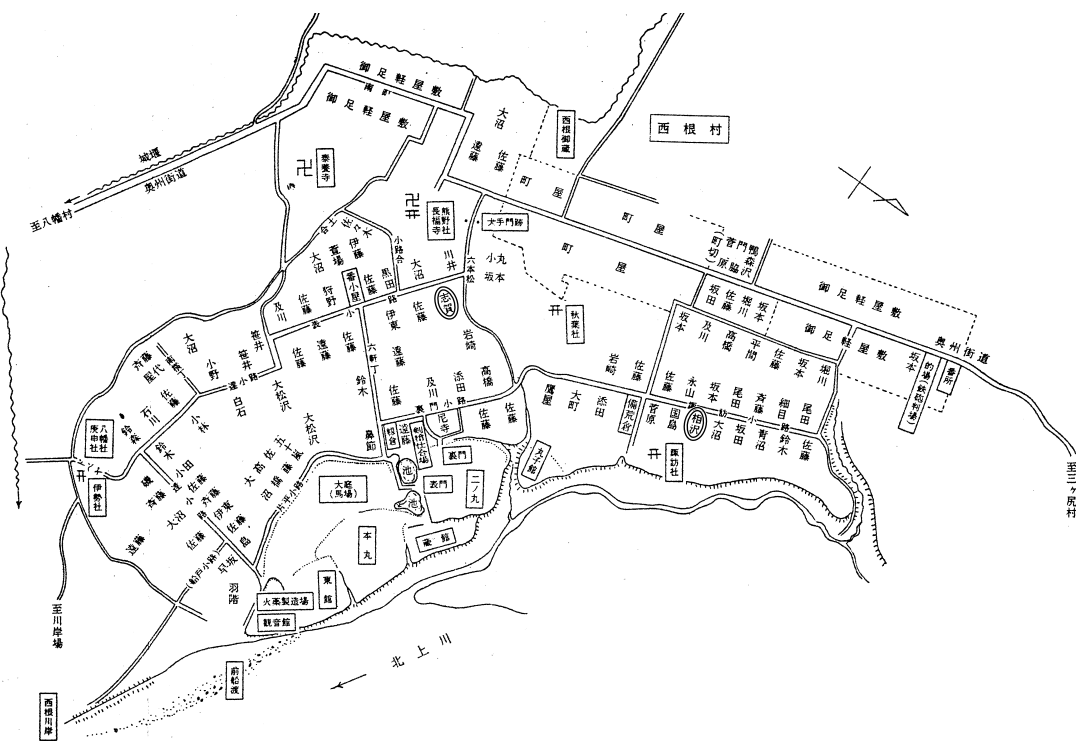


図1 大町家家中屋敷略図

貞享5年(1688年)3月24日(大町備前定頼書出絵図より)
筆者は志賀家と相沢家の位置に◎で表示した。

年に国から現在、全国に83地区¹⁰⁾ある重要伝統的建造物群保存地区の一つ「城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区」として指定されたものである。同保存地区は武家屋敷群以外に商人地と2つの足軽屋敷を配置しており、近世期の城下町としての町割（東西690m、南北980m、面積34.8ha）が残存している³⁾。

図1は貞享5（1688）年における大町家中屋敷略図であり、その武家屋敷群の多くには300年以上経つ現在もその子孫が居住している。その中で相沢ミサホと志賀ミエの生家は300メートルほどの距離内にあり、歩いて数分という近隣である。

Ⅲ 同保存地区から輩出せる明治女医

まず、2名の明治女医の履歴を簡略に記載しておきたい。

1) 曾根（相沢）ミサホ¹¹⁾

- ・ 明治18（1885）年、相沢寅治牧師の長女として出生
- ・ 金ヶ崎小学校、仙台尚綱女学校を経て明治39（1906）年、同志社女学校高等普通科を卒業



写真1 フィラデルフィア女子医大卒業式正装（25才）

- ・ 明治37（1904）年、観光旅行中の米国富豪に同伴した長男が腸チフスに罹患。しかし同志社看病婦学校の医療スタッフの献身的治療に



写真2 フィラデルフィア女子医大の卒業証書

ラテン語で記載されている。

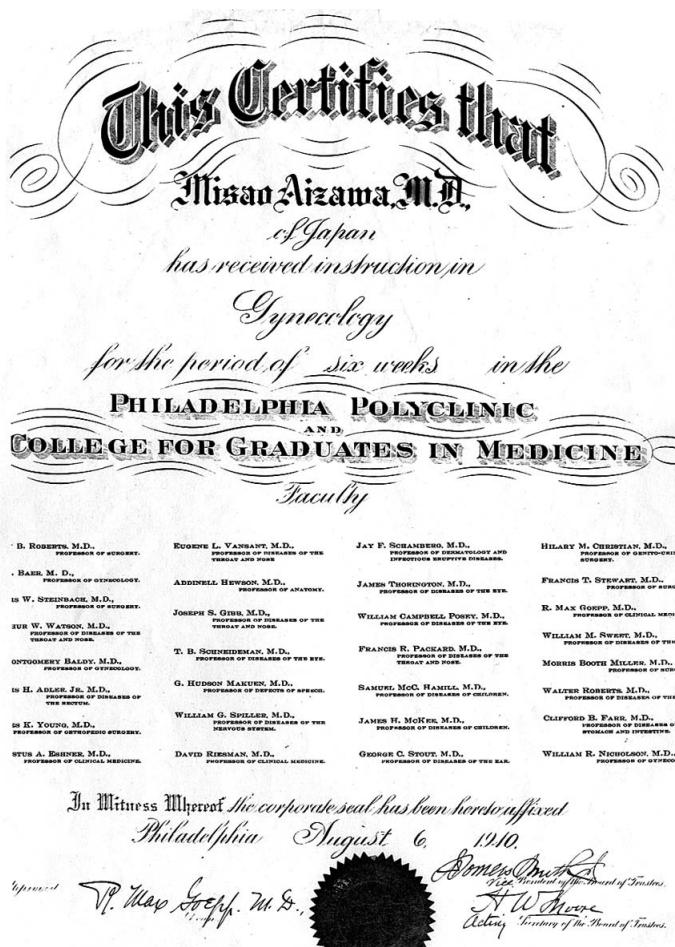


写真3 ペンシルバニア病院婦人科「6週間講義」修了証書
 卒後専門科研修と思われる。

より全治し、帰国したことにより、医学志望女子留学生の留学費用負担を申し出る。相沢ミサホと兵庫県出身の中川モトが推薦され留学¹²⁾、¹³⁾。

- ・明治39(1906)年、フィラデルフィア女子医大入学。註(1)
- ・明治43(1910)年、同校卒業(写真1は卒業式の正装, 25歳, 写真2は同女子医大卒業証書), 卒後、婦人科専修(ペンシルバニア病院婦人科「6週間講義」受講, 写真3は同講義修了証書), M.D.の学位を受け, 同年8月に帰国。帰国後, 同年に医師免許証(写真4, 転籍及び分家のため本籍地は福岡県, 日付は昭和9年と変更)を交付

- ・明治44(1911)年5月に曾根三治牧師と結婚, 同年8月に東京千駄ヶ谷で医院開業
- ・大正5(1916)年に夫の転勤のため, 八戸に転居・開業, 更に大正7(1918)年, 福岡に転居
- ・大正9(1920)年に日本赤十字社福岡支部診療所長兼久留米診療所長に任命
- ・昭和16(1941)年8月, 病夫看病のため辞職(翌年3月, 夫死亡)
- ・昭和18(1943)年, 東京に転居, 昭和20(1945)年, 岩手県に疎開, 戦後, 東京, 横浜で余生
- ・昭和44年5月, 他界(享年84歳)

同女医は生涯に亘って熱心なクリスチャンであり, 愛と奉仕の精神で医療に当たり, 慈



写真4 医師免許証

本籍地は福岡県，日付は昭和9年1月16日となっているが，書換えの理由は転籍及び分家のためとなっている。

母のように多くの患者に慕われたという。

邦公の典医に推挙され，その孫が赤痢菌を発見した志賀潔¹⁵⁾

2) 志賀ミエ^{2),4),14)}

- ・ 明治13 (1880) 年，志賀英之進 (貧乏士族) の次女として出生。志賀家は伊達氏家老大町家の藩医志賀理節の血筋。理節は後に伊達慶

- ・ 明治32 (1899) 年，私立松操学校 (後の仙台の裁縫学校) 卒業。尋常小学校に赴任。
- ・ 明治34 (1901) 年，私立岩手医学校 (現岩手医科大学) に入学。これは，ミエの兄，和多利



写真5 志賀ミエの家族 (大正5年頃)

前列左より 志賀ミエ (35才頃)，やな子 (和多利の長女)，父英之進，母五百重，学而 (和多利の長男)
後列左より 美子 (ミエの長女)，キシ (ミエの姉)，和多利 (ミエの兄)，リセ (和多利の妻)



写真6 志賀家旧屋敷

天保4年(1834)建立, 昭和50年(1975)解体. 解体時に築141年となる.

- の意向による. 註(2)
- ・明治35(1902)年, 同校を辞し, 兄を頼って上京, 女子医学研修所, 私立東京医学校, 日本医学校などで医術研鑽
 - ・明治37(1904)年, 前期医術開業試験合格
 - ・明治39(1906)年, 結婚, 翌年に長女出産. 註(3)
 - ・明治44(1911)年, 医術開業後期試験合格, 医籍登録
 - ・大正元(1912)年, 宇都宮にて内科小児科医院開業(写真5は開業間もない35歳頃に家族, 娘らと一緒に撮影したもの), その後, 宇都宮第一高等女学校, 宇都宮看護婦学校講師などを歴任.
 - ・昭和23(1948)年, 廃業. 孫娘, 故郷の両親, 姉と同居
 - ・昭和45(1970)年, 地域母子衛生の向上への貢献に対して銀杯授与される
 - ・昭和48(1973)年, 他界(享年94歳)

同女医は不屈の精神・努力で苦学実行した人物であり, 患者に対しては誠心誠意をもって医療に尽くしたとのことである. なお, 天保4年(1834)に建てられた志賀家旧屋敷は

昭和50(1975)年に解体され, 写真6が残っているだけである.

3) 明治女医2名の教育的環境と父親等からの影響

筆者は同保存地区から同時期に輩出した二名の明治女医に何らかの交流・共通点があったのではないかと考えた. しかし, 生年の僅かな違い(明治18年と明治13年), 二人の育った環境の違い(牧師の家庭と貧乏士族の家庭), 教育環境の違い(同志社修学・米国での医学修練と東京での苦学)等により, 筆者の調査では二人の間には一生涯を通じて接点・交流が見いだせなかった. しかし, 二人の女医がともに父親の強い影響下にあったことは注目される.

相沢ミサホは同志社出身の父親, 叔父(父親の弟駒之丞)に強い影響を受けて育ち, 同志社修学を運命づけられたと思われる. 父親相沢寅治と駒之丞は金ヶ崎教会を設立すると共に, 金ヶ崎歩光会という少年会を結成し, 40余名の少年達の魂をゆきぶり, 目覚めさせた¹⁶⁾. 金ヶ崎歩光会で育った少年達の中から同志社に7名(その中の一人が相沢ミサホ), 岡山英学校に3名が入学したという. 明治時代の東北辺境地では交通事情, 経

済事情から考えると驚異的な快挙であると胆江日々新聞誌は論評している¹⁶⁾。

相沢ミサホの教育はキリスト教的環境から由来するものであるが、彼女も最初から医者になろうと思っていたわけではなく、キリスト教を介して何らかの社会貢献を描いた人生設計をもっていたと思われる。そこへ米国富豪からの医学志望女性の派遣申し出に対し、彼女が推薦されるという偶然が重なって人生が大きく転換されたものである^{4),11),12),13)}。当時、岩手の辺境地から北海道に出稼ぎに出発する時さえ水杯を交わす時代に、娘の太平洋船旅での留学は父親の後押しが大きいと思われる。

また、志賀ミエの生育環境は相沢ミサホのそれとは全く別次元の環境から由来している。戊辰の役で薩長官軍の軍門に屈服し、明治維新では士族から平民に格下げとなった。志賀ミエの父親志賀英之進は一家を支えるべく養蚕業、飲食業等を生業としたが、「武士に商法」の譬えで赤貧を強いられ、「鯨の灯油の元で賃稼ぎの魚網すきでやっと出来たお金で米を買う」¹⁷⁾の生活であった。1男3女の志賀家の生活が厳しかったことは想像に難くない。

しかし、志賀ミエの父親英之進も赤貧の生活にも拘わらず信念とも思えるほど熱を入れたのが子ども達の教育のことであった（長女キシは岩手県第24号の産婆免許取得、三女シモは岩手女子師範学校卒業後小学校訓導）。ミエの娘婿志賀健次郎は「賊軍のみじめさを余儀なくされた貧乏士族の意地と誇りとそれゆえに貧窮の中で精進した教育のバネの力だ」とミエや長男和多利らを育てた父親の教育力を絶賛している。

このように、2人の明治女医に共通しているのは執念とも思える父親の教育への情熱であり、生活・教育環境は異なっても明治女医に押し上げる主因として父親の影響は大きい。

IV 同保存地区から明治女医2名を輩出した要因

胆江日々新聞誌の論評によれば、「こうした人材が育ったのは金ヶ崎町の人々のバイタリティー

と教育熱心な風土によるものだろう。物を作り、残すこと以上に人を作り、育てること、すなわち”教育の重さ”を証明しているようだ⁴⁾」となっている。

筆者は同保存地区から明治女医2名が輩出された要因を、さらに時代的背景と地域的背景に分けて再評価・考察してみたい。

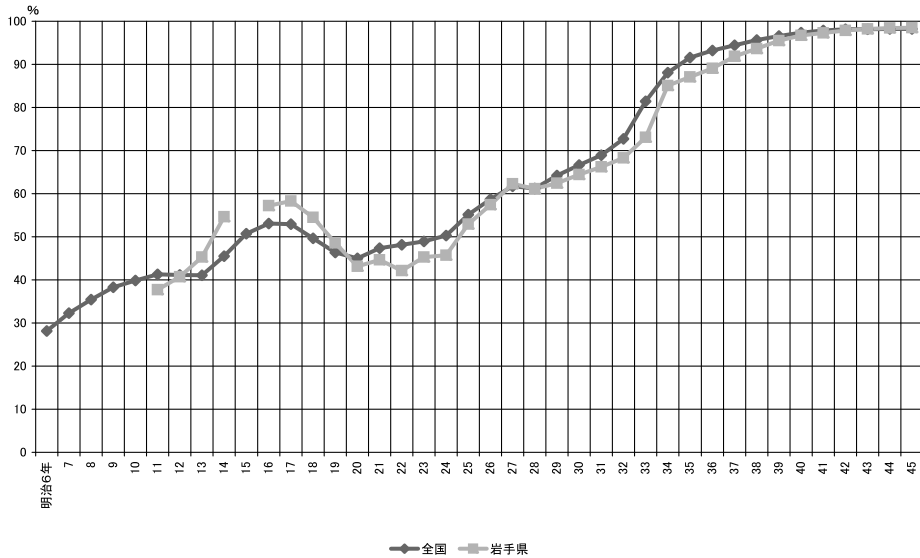
1) 時代的背景

①自由民権運動の台頭：明治14年に板垣退助らが自由党を結成し、更に帝国議会開設と共に自由民権運動が展開された。金ヶ崎には、明治維新後の逆境にありながら自由民権運動の担い手になった人々として添田寿治、細目退助、坂本鏡らがいるが^{18),19)}、彼らの運動の動機は教育を通じて現況から脱却することであったという。明治時代の彼らの運動が「教育の町金ヶ崎」としての伝統の礎となったものと思われる。同保存地区から輩出せる明治女医2名も地域の自由民権運動の影響を受け、それに基づく教育の力が働いたものと思われる。志賀ミエは宇都宮での開業資金200円を前述した添田寿治氏から無利子で借りたことに限りない感謝を捧げており、毎月5円ずつ律儀に返金し、最後の5円を返すときには自ら金ヶ崎の添田家を訪問して心からの礼を述べたとのことである。

②女性の社会的地位：明治政府は国家の近代化、富国強兵を最優先課題とし推進していったが、女性は家庭を守るべき存在として良妻賢母が女性の理想像とみられていた。従って、女性には参政権無く、職業選択も限定されていた。明治女医は極めて例外的な存在であり、志賀ミエが開業したとき、1ヵ月以上に亘って1人の患者もなく「女ふぜいに命が託されるか」の時代であった²⁰⁾。

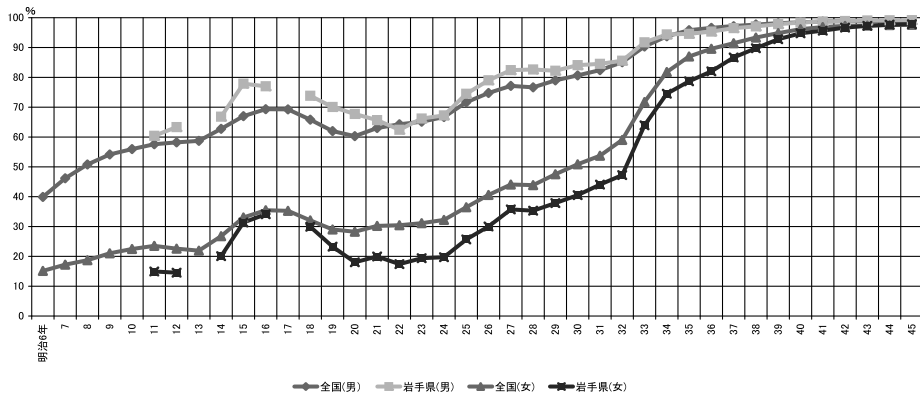
③教育制度の整備^{21),22)}：江戸時代には各藩に藩校（金ヶ崎には明興館）、寺小屋があり、家臣やその子弟が読み書き算術等を習っていた。明治維新後、人材の育成のため教育の重要性が認識され、欧米の教育制度に習って明治5年に学制が発布された。

明治5（1872）年～明治45（1912）年の義務教



グラフ1 明治期における義務教育就学率の全国と岩手県の比較

出所：岩手県教育委員会編：岩手県近代教育史①明治編 1714～1716，昭和56年



グラフ2 明治期における義務教育男女別就学率の全国と岩手県の比較

出所：岩手県教育委員会編：岩手県近代教育史①明治編 1717～1719，昭和56年

育平均就学率の推移はグラフ1に示す通りである。全国就学率は明治6年の就学率28.13%から発足して、漸次上昇し明治45年には98.23%に達している。その推移を岩手県でみると明治17年前後を除いて全国と比較して岩手県の就学率はやや低い傾向がある。その就学率を男・女で比較すると(グラフ2)、明治初期～中期にかけて男児の就学率が女児のそれを大きく上回っており、明治40年以降になって女児の就学率も男児のそれに

ようやく接近している。男児の就学率は全国と岩手県とで大差はない(明治15年前後や明治28年前後は全国よりも岩手県の就学率がやや高い)。一方、女児の就学率は男児のそれに比して明らかに低く、特に岩手県女児の就学率が明治中期に低いことが注目される。岩手県平均就学率が全国平均就学率に比してやや低かったのは、女児就学率の低調さに因ることが明らかである。それは封建時代以来の因襲による女子教育無用論が岩手県の

表1 明治6年の宮城県、水沢県、旧岩手県における小学校数、男女別小学校児童数、就学率、人口百中就学児童数

		宮城県	水沢県	旧岩手県	全国
小学校数		225	302	99	13,916
就学児童数	男	19,789	20,603	5,294	954,741
	女	3,341	2,205	1,462	304,554
就学率 (%)		32.60	35.10	13.90	28.13
人口百中就学児童数		5.60	6.06	0.10	3.71

(註) 就学率は県庁文書の学齢児童数によって算出したものである。

出所：岩手近代教育史①明治編 p.1723, 昭和56年および倉沢剛「小学校の歴史」第1巻 360～362, 昭和38年に依る。

就学率向上を妨げていたと思われる。貧困家庭では女兒を就学させないで家庭内労働に従事させ、時には女兒を他家へ奉公に出すこともあったという。

④女子の入学できる医学校の設置¹⁾：明治時代における男子医学校は全国に散在していたが、女子の入学できる医学校は13校に過ぎなかった。そのうち済生学舎の女子学生受け入れが女医養成(明治女医73名在籍)を後押したが、明治33(1900)年に突然に女子入学が停止され、そのため東京では東京女医学校(現東京女子医大)、女子医学研修所、東京医学校、日本医学校がその後を承けて女医養成を担うことになった。大阪では大阪慈恵医院医学校(明治28(1895)年創立)と関西医学院(明治35(1902)年創立)が女子医学生の学ぶ場であった。明治女医の中では複数の学校での履修者も多く¹⁾、より適した勉学の間を求めて医術開業試験合格のために苦学・力学したことが偲ばれる。

⑤欧米医学校の日本女子留学生の受け入れ：明治維新後、国の近代化が進んだとはいえ、欧米への留学医学生は極めて希有な例である。飛行機のない時代に長い船旅で留学し、言葉の通じない欧米での勉学には大変な苦労があったと想像される。明治女医239名のうち米国留学生は9名に過ぎず、受け入れ先は、ペンシルバニア女子医科大学に3名、クリーブランド・ホメオパシー医学校に1名、クリーブランド医大に1名、ミシガン大学医学部に1名(クリーブランド医大とミシガン

大医学部の両方で1名が学んでいる)、カリフォルニア大学医学部に1名、不明の外国医学校に3名となっている¹⁾。

以上、時代的背景については、自由民権運動の台頭のように明治女医輩出に追い風となった要因もあるが、女性の社会的地位が低かったこと、封建時代以来の因襲による女子教育無用論、女医養成校の選択幅の狭さ等、女医輩出に逆風が吹いていたことが明治時代の実情であったと思われる。そのため、女医を目指して勉学に励んでいた女性にとって大変な苦学を余儀なくされたと思われる。

2) 地域的背景

ここでは金ヶ崎とその周辺地域(胆沢郡)の地域特異性について検証してみたい。

①藩政時代からの教育風土：大町氏藩政時代に家臣とその子弟の教育機関として明興館²⁴⁾があり、大町氏は家臣・子弟の教育には殊の外、力を注いだと言われている。明治時代になってもその伝統は受け継がれた。この地域は先に述べたように、明治9(1876)年までは水沢県に属していた。水沢県の多くは江戸時代から伊達藩に統治され、文化・気質的にも仙台の影響が及んでいると言われる。そこで、明治6(1873)年の宮城県、水沢県、旧岩手県の就学状況を比較すると表1の通りである。旧岩手県の就学率は13.9%、水沢県の就学率は35.1%と両県の間に大きな格差があった。宮城県のそれは32.6%²³⁾であり、水沢県のそれと有意差はない。このことから宮城県と水沢県は江戸時

代に伊達藩領であり、旧岩手県に比して教育的伝統を色濃く残していると思われる。

藩政時代からの胆沢郡の教育風土は高く、明興館が金ヶ崎小学校となり、水沢の立生館が塩竈小学校となり多くの人材(後述の偉人)を輩出している²⁵⁾。同保存地区から輩出した明治女医2名についても、このような地域的な教育基盤に醸成された父親の教育に対する信念がその原動力になったものと思われる。

②キリスト教普及：江戸時代には鎖国政策の元にキリスト教禁令が厳しく明治維新になって禁令が解かれたのは明治6(1873)年であった。

水沢にキリスト教が伝えられたのは明治10年頃に最後の水沢藩主・留守基治が脚気を病み、主治医・阿部靖之助が伝道中のクレッカー宣教師のことを東京開成学校(現・東京大学)在学中の山崎為徳(水沢出身)から聴き、同宣教師に往診を依頼したという偶然によるものであった。同宣教師は明治11(1877)年に来水し、留守基治の診療に当たった後、町内の有志を集めてキリストの福音を伝えたのが、水沢におけるプロテスタント・キリスト教伝道の始まりである²⁷⁾。一方、山崎為徳は東京大学の学風に疑問を感じ、心酔していた新島襄の同志社英学校に転学し、キリスト教に深く帰依していった。

その後、金ヶ崎小学校校長の片桐清治は山崎によって感化され、職を辞して同志社に就学すべく明治13(1880)年に旅出た。しかし、山崎が水沢教会創立の志半ばで明治14(1881)年に24歳で夭折した。その為、片桐は卒業後直ちに水沢に帰り明治18(1885)年に水沢教会を創立した²³⁾。

片桐の金ヶ崎小学校時代の教え子に相沢寅治がいた。相沢は明治18(1885)年に水沢教会の集会で嘗ての恩師片桐の説教を熱心に聴講し、片桐の説く福音に心を揺さぶられた。相沢も師の後を追うように金ヶ崎小学校教員の職を辞して明治20(1887)年に同志社に入学、明治24(1891)年に卒業した。彼は自宅を金ヶ崎教会に提供し、牧師として伝道活動に邁進した。相沢らの結成した金ヶ崎歩光会々員に後年になって名を挙げ、社会に貢献した人が多い^{16),26)}。曾根ミサホもその一人

であり、山崎為徳、片桐清治、父親相沢寅治等の先人から心をゆさぶられ、一生涯熱心なキリスト教徒として医道に身を捧げたのである。

③岩手県南部における偉人輩出：歴史的に見て、一関には建部清庵、大槻玄沢・磐溪・文彦(大槻三賢人)、水沢には高野長英、山崎為徳、後藤新平(医師であり、東京市長、逓信大臣等)、斉藤実(二二六事件で暗殺される、元首相)、片桐清治等が輩出している。そのうち、高野長英、後藤新平、斉藤実らは数十メートル以内に生家があり、その地域は通称「偉人通り」として市民に親しまれている。山崎為徳、後藤新平、斉藤実、片桐清治は水沢の立生館で共に漢学を学んだ仲で文字通り竹馬の友であったという²⁷⁾。金ヶ崎町は相沢寅治・駒之丞らの同志社で学んだキリスト教伝道者達、佐藤得二(直木賞授賞)²⁸⁾を輩出している。これらの歴史的人物の輩出が明治女医輩出の追い風となったと考察され、また、それはこの地域に培われた開明的文化に馴染む素地によるものと思われる。

V 結 語

同保存地区かつ明治末期に明治女医2名を輩出したことは、女性の社会的地位の低さ、女性の義務教育就学率の低さ(女子教育無用論)、女子入学の医学校の未整備等の時代的背景にマイナス要因があるものの、上記の3項の地域的背景と自由民権運動の台頭(時代的背景として)によるところが大きいと推定される。

さらに、この二人の明治女医における共通点を敢えて挙げれば、東北人の粘り強さ・負けじ魂(飽くなき挑戦と鉄の意志)と父親の教育的執念であろう。二人は女医になった動機や経緯を異にするが、曾根(相沢)ミサホにはキリスト教徒としての強い信念が彼女を突き動かしたことが大きく、志賀ミエには武士道的信念²⁹⁾が彼女の心を揺り動かしたものと思われてならない。

なお本稿の概略は第111回日本医史学会(平成21年6月6日、於佐賀市)において一般口演で口述した。

謝 辞

本稿作成に当たり、佐藤和三先生（元日本大学医学部皮膚科助教授）、柿沢佳子氏（曾根ミサホの孫）、志賀かう子氏（志賀ミエの孫）、高橋美和子氏（志賀和多利の孫）、三崎裕子氏（“明治女医の基礎資料”の著者）にいろいろご教示を得た。稿を終えるに当たって万感の思いで諸氏に深謝申し上げたい。

註

- (1) 入学後はラテン語習得への並々ならぬ苦学（当時、米国では医学生はラテン語必須）、講義について級友達の助力、米国富豪夫妻の学費以外も衣食住一切の面倒見等々に感謝の意を表していることは参考文献11)に記述されている。
- (2) 和多利は父、英之進から医師となるべく私立岩手医学校に入学させられたが、父の意向に背いて法律家を目指し、上京、苦学の末、弁護士になり、後に衆議院議員（ミエについては手の器用さを見込んで裁縫学校に入学させたが、父の意向に添えなかった和多利は医師になるようミエを説得）。
- (3) 後に長女も女医になるが、昭和17（1942）年34歳で夭折。ミエは医師修練の傍ら、孫二人を養育。

参考文献

- 1) 三崎裕子：明治女医の基礎資料，日本医史学会雑誌 2008；54(3)：281～292
- 2) 志賀かう子，祖母，わたしの明治，一関，北上書房，昭和57年
- 3) 千葉周秋編：藩境の緑ゆたかな要害手帖——金ヶ崎町城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区——，金ヶ崎，くらしと文化を記録する会，平成18年
- 4) 胆江日々新聞：〈時針〉金ヶ崎，明治の女医，平成15年10月21日
- 5) 金ヶ崎町史，近・現代編，19～23，平成3年
- 6) 佐藤和三，わたしの金ヶ崎，(有)金ヶ崎印刷，15～

- 26, 平成16年
- 7) 5)と同じ 716～726
- 8) 5)と同じ 363～366
- 9) 高橋紀雄，ガーデンシティの街角から——田舎町長16年奮戦記，(有)金ヶ崎印刷，174～193，206～222，平成20年
- 10) 全国伝健保存地区協議会編，“歴史の町並”，平成20年
- 11) 曾根ミサホ：私の歩いた道，尚綱92～97号，昭和44年
- 12) 秋山龍三：日本女医史，東京，日本女医会本部，194～199，1962
- 13) 長門谷洋治，女子医学留学生(下)，日本医事新報 No.1895(昭和35年8月20日)：60～64
- 14) 岩手県医師会編，岩手県医師会史 上巻770～771，昭和55年
- 15) 2)と同じ，p.45
- 16) 胆江日々新聞：〈時針〉金ヶ崎歩光会，平成2年7月5日
- 17) 2)と同じ p.7
- 18) 城内史編纂委員会，城内史，61～68，昭和60年
- 19) 諏訪小路—その今と昔，諏訪小路雑感 124～133，昭和59年
- 20) 2)と同じ p80
- 21) 岩手県教育委員会，岩手県近代教育史①明治編 1714～1729，昭和56年
- 22) 倉沢 剛：小学校の歴史 第1巻，360～362，昭和38年
- 23) 宮城県教育委員会編：宮城県教育百年史 第1巻明治編，p131，昭和51年
- 24) 6)と同じ 72～88
- 25) 岩手県教育会胆沢郡部会，胆沢郡誌，非売品，139～140，昭和2年1月20日
- 26) 基督教新聞600号，陸中水沢・金ヶ崎通信，明治28年1月25日
- 27) 高橋光夫，水沢の近代キリスト教人物史，私家版，9～262，1998年
- 28) 6)と同じ 125～147
- 29) 新渡戸稲造(岬龍一郎訳)，武士道，PHP文庫，146～163，2005

Two Woman Medical Doctors of the Meiji Era Who Came from the “Preservative District of Johnai Suwakohji Important Traditional Buildings Group”, Kanegasaki Town, Iwate Prefecture

Masakazu FUKUSHIMA

Chiba Municipal Sakuragien

There is a historical group of samurai buildings called the “Preservative District of Johnai Suwakohji Important Traditional Buildings Group” in Kanegasaki Town, Iwate Prefecture. Two woman medical doctors (Misaho Aizawa and Mie Shiga, 相沢ミサホと志賀ミエ) came from this district at the end of the Meiji Era (1910–1911). Misaho Aizawa was born in a minister’s family in 1885 and studied at the Women’s School of Dohshisha. After graduation she studied abroad at the Women’s Medical College of Philadelphia and graduated from the college in 1910. Immediately after graduation she came back to Japan and got a medical license in Japan. She married a minister and was employed by the Red Cross Clinic in Fukuoka Prefecture. Mie Shiga was born in a samurai-family in 1880 and worked her way through various medical schools in Tokyo. After three failures to pass the national medical examination she received a medical license in 1911. In 1913 she opened her clinic of internal medicine & pediatrics in Utsunomiya. She made an effort to diagnose correctly and won patients’ confidence.

These two women had neither communication nor common points due to the differences of their family environment and their age. However, they were brought up by fathers who were enthusiastic for education and they made an effort to become woman doctors. Although women’s social situation and the female compulsory education rate were low, and women’s medical education was poor in the Meiji Era, Misaho Aizawa was able to enter the medical route under the influence of Christianity, and Mie Shiga through the assistance of her family and her samurai spirit.

Key words: Kanegasaki Town, Misaho Aizawa, Mie Shiga, Christianity, Spirit of samurai